

審査の結果の要旨

氏名 藪垣 将

近年臨床心理学や発達心理学において、中年期は生涯における危機的な時期の1つとして注目されている。どういう条件が中年期の精神的健康を規定するのかという問いへの取り組みは、理論的にも実践的にも重要性を増しているといえる。本論文は、中年期の適応を個人よりも夫婦という関係の問題として捉え、システム論の観点に基づき複数の研究方法でアプローチしたものである。

本研究は全5部12章で構成されている。第I部では、第1章において二者関係がどのように研究されてきたかを概観し、システム論的観点の重要性が指摘された。第2章では中年期夫婦関係の心理学的研究を展望し、第3章で研究の課題と今回のテーマについて明示された。その上で、第4章で夫婦関係の満足度と諸変数の関係についての大枠を提示する社会調査を行なって今回の論文全体の土台としている。第II部と第III部では、自らの夫婦関係に対するどのような認知が精神的健康と結びつくかが調査された。まずは第II部で評定のための尺度を作成しているが、第5章ではその理論的基盤となるポジティブ・イリュージョン (PI) の概念を導入し、第6章で夫婦が自らの関係の評価に用いる5つの次元を抽出した。その上で第7章では、各次元において夫婦関係におけるPI、つまりポジティブ・マリタル・イリュージョン (PMI) の存在を示した。第III部では、第II部で抽出された5次元をもとに作られた尺度を用い、第8章でPMIが安定して中年期夫婦の適応に寄与すること、その様相は次元によって異なること等を見出した。さらに第9章では、それぞれの次元に関わる属性がどれだけ獲得しやすいかによって、PMIの強度は違ってくことも示した。ひき続き第IV部では、ユニットとしての夫婦がその内部でいかなるコミュニケーションをしており、それが適応にどのように関係しているのかを調査している。第10章においては、まず中年期の夫婦が夫婦間の葛藤についてどのようなコミュニケーションを行うか、8組16名の健常と考えられる夫婦の対話に会話分析を適用し、「夫婦間葛藤の開始、夫婦間葛藤、夫婦間葛藤の終結」という3つの段階を見出した。その結果をもとにして、第11章ではカップル・セラピーを受けている9組18人の夫婦を対象に、そのコミュニケーションの特徴を検討して一般的な夫婦との比較を行い、特に、葛藤の扱い方と会話の終結のやり方が両群で異なることを示した。最後に、第V部で総合考察が行なわれ、夫婦関係について2つの面から得られた知見の関係と意義について議論がなされ、その上で知見の臨床実践への応用の可能性が論じられた。

本論文は、単に個人の精神的健康に注目するのではなく、夫婦というユニットにおける適応を複数の面から検討し、家族療法など心理臨床的な実践に貢献しうる知見を示した点で優れた成果をもたらした。混合研究方法としていかに知見を統合するかという点でやや課題は残るものの、二者関係研究を新たな方法で取り組み、従来の知見に一石を投じた点で、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。